

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成26年9月26日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 医学研究科人間健康科学

職 名・学 年 博士課程2回生

氏 名 福 谷 直 人

助成の種類	平成26年度・研究者交流支援・国際研究集会発表助成／一般	
研究集会名	European Respiratory Society International Congress 2014	
発表題目	Airflow limitation is associated with reduced skeletal muscle mass in community-dwelling older men	
開催場所	International Congress Center Munich in Germany	
渡航期間	平成26年 9月 4日 ～ 平成26年 9月12日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会計報告	交付を受けた助成金額	250,000円
	使用した助成金額	250,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	交通費:160,000円 ----- 学会参加費:50,000円(セミナー参加含む) ----- 滞在費:40,000円 ----- ----- -----
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回は国際学会発表における助成金を頂き、ありがとうございました。今回は、学会参加費等も高く、実質、交通費・宿泊費・学会参加費を合わせて25万円以上の支出でした。そのため、特に学会参加費を考慮して頂けると、非常に助かります。	

『European Respiratory Society International Congress 2014』でのポスター発表を終えて』

報告者: 福谷直人

今回は、ドイツのミュンヘンで開催された European Respiratory Society International Congress 2014 に参加し、ポスター発表をしてきたため、その成果を報告する。学会は5日間に及び、研究発表、企業展示、各国の呼吸器に関わる協会の紹介ブース等、毎日活気に満ちあふれていた。参加者は、医師と理学療法士が多い様子であったが、看護師などの多職種が参加していた。

今回が私にとって初めての国際学会での研究発表ということもあり、すごく緊張していたが、各国の参加者の方々は非常ににこやかで、フレンドリーであったため、すぐに馴染むことができ、語学力に不安はあったが、分からないことは素直に聞くことが出来た。こちらの表現力が乏しくても、必死に理解して説明しようとしてくれる、参加者の姿勢は非常に嬉しかったことを覚えている。

今回の私の発表演題のメインテーマは“地域で慢性閉塞性換気障害 (Chronic Obstructive Pulmonary Disease; COPD) 患者を早期発見し、早期から介入して行くべき”という内容であった。COPD 患者は本邦に 530 万人いることが明らかになっているが、診断を受けている COPD 患者は約 22 万人しかおらず、残りの 500 万人以上が、地域に潜在し、診断されないままである。さらに、COPD 患者は診断される頃には病気が進行しているだけでなく、筋萎縮などの合併症が進んでいることが明らかにされている。そこで、我々は、地域でスパイロメトリーという呼吸機能検査を行うことで、COPD の診断基準である 1 秒率が 70%未満である者 (Airflow limitation; AL) を抽出した。さらに、地域で新たに発見された AL の者の筋肉量を計測してみると、健常高齢者と比較して、明らかに筋萎縮が進行していることが分かった。この筋萎縮は、運動機能や日常生活動作の制限因子となり、予後悪化に関わる要因であるため、筋萎縮に対する早期からの介入が必要であると結論づけた。本学会においても、多くの発表演題やシンポジウムにおいて“地域での早期発見”をテーマにしている議題が多く、世界的にもさらなる研究が必要とされていると肌を持って感じる事ができた。イタリアで健診車を使用して、各地域を回って呼吸機能検査をしたり、地域の薬局を利用して検査を行っている先生が『COPD という言葉は、これからは Creating Opportunities Patients Diagnosis にならない』と、独創的な言葉で、地域での早期発見の必要性を訴えたのは今でも記憶に鮮明に残っている。

本学会での発表を聞いている際に日本では感じたことがなく、新鮮に感じる経験がもう一つあった。それは、研究の弱点を突こうとする意見も多い日本の学会とは異なり、みんなで発表中の研究がより良くなるように、意見を出し合おう、そして、この研究結果をいかにして自分の患者さんに適用できるか？ということを実際に考えている雰囲気非常に強く、その質疑応答の時間は、非常に刺激的な体験であった。さらに、ポスター会場では、発表時間以外も積

極的に議論しあう参加者の積極的な姿勢が印象的であった。各国の発表を見ていると、研究の質も非常に高く、勉強になるものばかりであった。さらに、研究発表を聞くだけでなく、これまでの研究でデータの解釈に困っていた COPD 患者の活動量データに関する有料のワークショップ (Cutting edge analysis of physical activity data) にも参加してきた。そこでは、論文でも参考文献に使用させて頂いている研究者達 (Dr. Pitta ら) から直接、データの処理や解釈の仕方などを指導頂き、多くの知識を得ることが出来たと感じている。そこで特に勉強になったことは、活動量計と歩数計のメリット・デメリット、活動量データを使用するときの除外すべき時間帯があることである。

私自身のポスター発表は、学会 4 日目の午後であり、座長や数人の質問者との討論を行った。前述した本邦の状況を説明したうえで、研究結果の報告をすると、非常に意義深い研究と評価してくれる方が多かったように思う。また、これまで日本では質問されたことがないような質問も頂き、返答には困ってしまったが、自分なりの意見を伝えることが出来た。

上記のような、これまでにない新たな経験を今回の国際学会発表では経験することができ、研究職を目指す身として、印象的な経験となった。さらに世界レベルの研究の質に触れることができたことや、これまでに参考文献として読んでいた研究者と直接ディスカッションできる機会があったことは、研究に対するモチベーションを高めるための一助となり、今後もより一層研究活動に取り組んで行きたい。さらに、研究成果を外部に出すだけでなく、しっかりと伝えるためには語学力も向上していかなければならないと切に感じたため、研究職になるために必要な自分自身の課題も発見することができ、非常に有益な経験となった。